

## 研究ノート

### ペトラルカと〈アヴェロイスト〉

近藤 恒一

#### はじめに

フランチェスコ・ペトラルカは、いわゆるアヴェロイストたちにたいして深い嫌悪反撥を示し、かれらを激しく攻撃している。このような攻撃は、むろん、かれらの権威アヴェロエスにもむけられる。しかも、このアヴェロエス攻撃は、ひろくアラビア文化全体にたいする敵意と切りはなしがたく一体をなしているように思われる。

ペトラルカにおいて、アラビア文化やアヴェロエスはどのように受けとめられていたのだろうか。ペトラルカのいわゆるアヴェロイストたちは、じっさいにはいかなる人びとだったのだろうか。また、かれの攻撃の内的動機はいかなるものだったのだろうか。これらの問題を中心に、ペトラルカの攻撃を分析し、それをつうじてかれの思想の一面に光をあててみたい。したがって本稿の主題は、あくまでもペトラルカ思想の考察であって、中世アラビア文化についての考察でもなければ、アヴェロエスや〈アヴェロイストたち〉の思想内容についての考察でもない。

#### 1 アラビア文化とアヴェロエス

1370年、66歳の老ペトラルカは、親しい医学者にあてた一書簡で、アラビア文化にたいする嫌悪の情をぶちまけている。

「私はこの〔アラビア人という〕種族全体がきらいです。ギリシヤ人について私の知るところでは、かれらはかつて知的活動や雄弁にきわめてすぐれた人びとでした。こうしてギリシヤ世界からは、偉大な哲学者や詩人たち、すぐれた弁論家や数学者たち、一流の医学者たちが輩出したのです。けれども、アラビア人はどうかと

いえば、むろん医学者たちについてはあなたをご存じでしょう。しかし詩人たちについては私が知っていますが、これほど好色で軟弱、これほど無気力で卑猥なものはありません。……アラビアから何か良いものがもたらされようなどとは、ちょっと信じられません」(Sen., XII, 2, p. 1009 [913]<sup>(1)</sup>)。

ここにみられるアラビア文化排撃は、まったく妥協の余地をのこさぬ全面的なものである。それにしてもペトルルカは、どのようなアラビア文化理解にもとづいて、このような全面的排撃の態度をとるのだろうか。このような態度を理由づけるべき具体的叙述らしいものといえ、しかし、わずかにアラビア詩人にかんするものだけである。それもごく主観的な決めつけの色合いがつよい。しかも、かれの他の著作のどこにも、アラビア文学についての具体的叙述はみられない。

それにしても、この大詩人は、偉大なアラビア文学について、どうしてこのような否定的結論に達したのだろうか。アラビア語に無知なかれは、いったいどの程度にアラビア詩を知っていたのだろうか。いくらか知っていたとすれば、どのようにして知ったのだろうか。

こうした問題をめぐって、いろいろな仮説が立てられよう。たとえば、ペトルルカはアラビア詩をラテン訳なり俗語訳なりによっていくらか知っていたのではないかと考えられうる<sup>(2)</sup>。もしそうだとすれば、どのような作品を、どのような訳によって読んだのか、さらに問題となる。また、イスラム文化の影響をこうむった南欧中世の詩派のどれかをさしているのではないかとの仮説も、あながち不可能ではあるまい。だが、決め手となるべき直接資料が現われないかぎり、仮説は仮説をよぶ結果とならざるをえない<sup>(3)</sup>。

むしろ、イスラム世界についての中世伝説がペトルルカのアラビア詩人観に影響していたのではないかと考えられうる。この点で興味ぶかいのは、マホメットについての中世伝説の一つがペトルルカの著作にみいだされることである。「かれ〔マホメット〕は、私が書物で読んだところでは、都市のうちではメッカとエルサレムを祝福し、ローマとアンティオキアを呪った」。そしてペトルルカは、その原因をあれこれと推測しつつ、このイスラムの聖者を「邪悪卑劣な略奪者」、「肉欲の師、あらゆる淫欲の扇動者」として描きだしている<sup>(4)</sup>。中世伝説に根をもつこのようなマホメット像、そして一般にアラビア人像が、キリスト者ペトルルカのアラビア

詩人像に反映していることも、やはり否定しきれないであろう。

しかしまた、ラテン古典文学にみられるアラビア人観の影響も無視できない。すでにラテン古典文学においては、伝說的富にめぐまれたアラビア人の「軟弱」は根強い伝承となっていた。そして、ペトルルカがアラビア詩人に貼りつけたような形容詞は、アラビア人をよぶさいの常套語となっていたのである。<sup>(5)</sup>ペトルルカ30歳代の作品『アフリカ』、第二ポエニ戦役に題材をあおいだこの叙事詩のなかにもすでに、「怯懦なアラビア人ども」(imbelles Arabes) ということばが見られる。<sup>(6)</sup>このようなアラビア人観を、ペトルルカは早くから、愛好するラテン詩人たちと共有していたのである。中世文化に不信感をいだき古典作品に典拠をもとめるのをつねとしていたペトルルカだけに、ラテン詩人たちのえがくアラビア人像は、中世伝説のそれよりも、かれにとってははるかに説得力があったのではないかと思われる。

いずれにせよペトルルカは、輝かしい中世アラビア文学について、具体的にはほとんど知るところがなかったといえよう。してみると、アラビア詩人についてのさきの叙述も、マホメットについてのそれも、むしろ表現上の効果をねらったレトリックにはかならないのではあるまいか（しかし、だからといって、それが無意味だということにはならないであろう。けだしレトリックは、その主体の心情や思想を、冷静な分析的な文章よりもいっそうよく語ることもありうるのである）。

してみると、ペトルルカが排撃しようとするアラビア文化なるものは、全体として、実体のない修辞学的虚構にすぎないのだろうか。

ところで、ペトルルカが具体的に名ざしているアラビア作家が、少なくとも二人はいる。アヴィケンナとアヴェロエスである。

アヴィケンナの名はただ一度だけみえるにすぎない。そこでは、かれの権威を絶対視して盲従する当時の医学者たちが皮肉られている。「そのようなことはなんら私〔の体〕には生じませんでした。私の病苦を私よりもアヴィケンナのほうがよく感じとっているとでもいうのなら別ですが」(Sen., XII, 2, p. 1007 [911])。

しかし、アヴィケンナその人については、なんら述べられていない。したがって、この偉大な医学者にたいしてペトルルカがどのような理解と評価を示していたかは知るよしもない。しかし、ペトルルカの全面的なアラビア文化嫌悪をみれば、アヴィケンナもかれの好意を期待できなかったことだけは確かであろう。いなむしろ、

多かれ少なかれアラビア医学の影響下にあった当時の医学や医者たちにたいするかれの根づよい反感や不信は、そのまゝ『医学範典』の著者にたいするものでもあったにちがいない。アラビア医学にたいするペトラルカの反感は「アラビア人〔医者〕どもの嘘八百」(Arabum mendacia) ということばに集約されている (*ibid.*, p. 1001 [905])。

ところで、もうひとりの偉大なアラビア作家アヴェロエスの名は、ペトラルカの著作中にしばしば見いだされ、しかも激越な攻撃にさらされている。そして、このようなアヴェロエス攻撃は、ペトラルカによるアラビア文化攻撃の大部分をなしている。この事実からみるに、ペトラルカのイメージするアラビア文化のなかでは、アヴェロエス思想が圧倒的の重みをもっていたといえよう。ペトラルカのいわゆるアラビア文化は、アヴェロエスによって代表されていたとみてよかろう。

## 2 アヴェロエス攻撃

ところで、ペトラルカのアヴェロエス攻撃は、『医学者論駁』(*Invective contra medicum*, 1352-55) 以後の著作や書簡に散見される。それらの攻撃のほとんどは、アヴェロエスにたいするキリスト者の敵意によって特徴づけられている。たとえば、晩年のペトラルカが年下の友ルイージ・マルシリあてにしたためた一書簡では、このアラビア哲学者は「名状しがたい狂気にかられてその主キリストとカトリック信仰に吠えたてる狂犬アヴェロエス」と決めつけられている。しかもペトラルカは、自分がすでにアヴェロエス論駁の小冊子を書くことを計画し、そのための資料集めに着手していたが、この計画を果たせないでいることを告白し、自分にかわってそのような小冊子を著わすことをマルシリに勧めている (*Sen.*, XV[XIV], 6, p. 812)。

ともあれ、ペトラルカのえがくアヴェロエス像も、護教的動機からする主観的決めつけの色合いがつよい。しかし、アヴェロエスについてのやや具体的な言及も、少なくとも三箇所にみられる。

その一つは、1343年から'45年にかけて著わされた一作品 (*Rerum memorandarum libri*) 中の文章である。ペトラルカにおいてアヴェロエスの名がはじめて現われるのはこの文章においてであるが、ここにはアヴェロエスへの敵意はみられない。ここでペトラルカは、プラトンはアリストテレスにまさるというアウグスティヌスの

証言を紹介したのち、つぎのように述べている。

「しかし、もしわれわれがアリストテレス注解者アヴェロエスの見解をたずねようとするれば、この保証つきの証人は……アリストテレスにおいて自然はその力を最大限に発揮したことを証明するであろうし、人びとがだれかをアリストテレスと比較しようなどとすれば一笑に付するであろう。私はといえば、両者〔アウグスティヌスとアヴェロエス〕の見解を聞くだけにして沈黙<sup>(8)</sup>しよう」。

ここでは、徹底したアリストテリアンとしてのアヴェロエスの基本的立場が正しく把握されているし、また「注解者」アヴェロエスの偉大さが認められている。

いま一つの具体的言及も、「注解者」アヴェロエスについてのごく簡単なもので、1367年の著作『無知について』に見られる<sup>(9)</sup>。

もう一つのそれは、『医学者論駁』第2巻(1353)にみられ、アヴェロエスの知性単一説に触れている<sup>(10)</sup>。

このようにペトルルカは、アヴェロエスについてはその仕事や思想を基本的に正しく把握していたといえよう。

ところで、ここで注目したいのは、アヴェロエスについてのペトルルカの語り口の変化である。

アヴェロエスについての最初の言及においては、アヴェロエスへの敵意がみられないどころか、その「注解者」としての偉大さが認められていた。ところが、それからほぼ10年後の作品『医学者論駁』第2巻(1353)においては、アヴェロエスは「正義の太陽そのもの〔キリスト〕にむかって……吠えついている」犬と決めつけられている(*Contra med.*, II, p. 52 seq.)。そしてこれ以後、ペトルルカのアヴェロエス観はまったく否定的なものになる<sup>(10a)</sup>。こうして「注解者」アヴェロエスさえも攻撃にさらされるにいたる(*De ign.*, p. 72 seq.)。

ところで、もう一つ注目したいのは、1353年にペトルルカがアヴェロエス攻撃の火蓋を切ったとき、この最初の攻撃は、教皇侍医攻撃の一環としておこなわれたということである。すなわちペトルルカは、その論敵を不信心なアヴェロイストにしたてあげて攻撃するとともに、この攻撃をいっそう効果的なものにするために、論敵の「師」アヴェロエスをキリストの敵として攻撃しているのである(次節参照)。

してみると、ペトルルカのアヴェロエス攻撃を誘発しているのは、じつは、アヴ

ェロエスその人というよりも、自分のまわりの<アヴェロイストたち>である。そのかぎりでは、ペトラルカのアヴェロエス攻撃は、西欧中世末の文化的・思想的危機に根ざした西欧内部の戦いであり、この攻撃がむけられている真の敵は、西欧内部の<アヴェロイストたち>にはかならない<sup>(11)</sup>。

さらに、「注解者」アヴェロエスへの攻撃について見ると、この攻撃は、注解の仕事に専念するスコラ学者たちへの攻撃とないあわされている。

「アヴェロエスがだれよりもアリストテレスを好むわけは、かれがアリストテレスの諸著に注解をほどこして、それらをいわば自分の財産にしたからです。それらアリストテレスの著作はおおいに賞賛にあたいますが、それらを賞賛する人間は眉つばものです。じっさい、古い諺にもあるとおり、『商人はみな自分の品をほめる』。自分自身では一行も書こうとしないくせに、しかも書きたくてたまらないので、ひとの作品の解釈家になりすましている連中がいます。いわば、建築のことがさっぱりわからないので、壁塗りを自分の仕事にし、これで賞賛をえようとしている連中なのです。……ひとの作品の注釈家、いや、ぶちこわし屋どもが、とりわけこんにちは、なんと群れ集まっていることでしょう。このことは、こうした無数の職人どもにさいなまれた『命題集』がまっさきに、もしも声あるものならば、嘆きつつはっきりと証言することでしょう」(*De ign.*, p. 72 seq.)。

ここではアヴェロエスは、まさにその「注解者」としての名声ゆえに、注解を仕事とする多くのスコラ学者たちの同類とみなされている。したがって、アヴェロエス批判には具体性がないにもかかわらず、スコラ学者批判がそのまま「注解者」批判として印象づけられる。要するに、「注解者」アヴェロエスへの攻撃も、その内容においてはむしろ、スコラの注解者たちへの攻撃にほかならない。

このように見てくると、ペトラルカの攻撃するアヴェロエス思想なるものは、その実体においては、西欧内部の<アヴェロイズム>およびスコラ文化の一面にほかならないといえよう。つまり、アヴェロエス思想、そして一般にアラビア文化は、それらがペトラルカの意識のなかで現実性をもっていたかぎりでは、むしろ一つの文化類型として、西欧ラテン世界内の<アヴェロイズム>やスコラ文化と切りはなしがたく一体をなしていたのである。

### 3 <アヴェロイスト>攻撃

ところで、ペトラルカのいわゆるアヴェロイストたちは、じっさいにはいかなる人びとだったのだろうか。

まず、ペトラルカが『無知について』のなかで攻撃している四人のヴェネツィア知識人であるが、かれらは E. ルナンらしい一般にアヴェロイストとみなされてき<sup>(12)</sup>た。ところが、この書においては、アヴェロエスはただ二度だけ、いわば付随的に触れられているにすぎない (*De ign.*, pp. 72, 73)。しかも、二度ともただアリストテレス注解者として触れられているだけで (前節参照)、かれの知性単一説その他の教説についてはなんら言及されていない。

なるほど、ペトラルカによれば、このヴェネツィア知識人たちは、宗教的なものをすべて軽蔑しているが (*ibid.*, p. 59)、しかしあからさまに不信心を表明するのははばかれるので「こっそりと信仰否定を表明している」(*ibid.*, p. 60)。さらにかれらは、「たまたま人前で議論するようなことになると、自分たちの誤謬を吐き出すことははばかれるので、さしあたり信仰は問題にせずそっとしておいて論究するのだと声明するのをつねとしている」(*ibid.*, p. 59)。ここには、いわゆる二重真理説にもとづくかのような態度が指摘されている。

ところで、かれらが宗教に否定的態度をとるのは、かれらが「キリスト者よりもむしろ哲学者とみられ」たがり、「学識の人とみられ」たがっているからである (*ibid.*, pp. 58, 59)。そのためにはしかし、かれらの考えでは、なによりもアリストテレス哲学に通じていなければならぬ。そして事実、かれらは「アリストテレス流の学識者」と自認しているのである (*ibid.*, p. 25)。こうしてかれらはアリストテレス盲従者として描きだされる (*ibid.*, p. 39 seq. et passim)。したがって、本書の根本テーマの一つをなす権威主義批判がまっさきに向けられるのは、かれらのアヴェロエス従属にたいしてではなく、アリストテレス従属にたいしてである<sup>(13)</sup> (アヴェロエス従属についての具体的指摘はどこにもない)。

以上から明らかなように、かれらがアヴェロエス説を受けいれているとの具体的指摘もなければ、アヴェロエス説にたいする具体的攻撃もない。むしろ、かれらの受けいれているアリストテレス説、なにかんづくキリスト教と相容れないとみられる諸説が攻撃されている (*ibid.*, pp. 40 seq., 58-65)。

してみると、ペトルルカが論敵たちの所説を正しく伝えているとしても、かれらはアヴェロイストというよりもむしろアリストテリアンと呼ばれるべきであろう。<sup>(14)</sup> なお、かれらがペトルルカのいうように不信心であったかどうかとも、にわかには断じがたい。少なくとも、かれらにかんする別の記録のあるものは、むしろ敬虔さを語っている。<sup>(15)</sup>

つぎに『医学者論駁』においては、ペトルルカは自分の論敵を、アヴェロイストと規定して攻撃している（そしてペトルルカによるこの規定は、多くの研究者によってそのまま受けいれられてきた）。<sup>(16)</sup>

ところで、この医学者とペトルルカとのあいだの論争のきっかけとなったのは、ペトルルカが教皇クレメンス六世あてにしたためた一書簡である（*Fam.*, V, 19）。<sup>(17)</sup> この書簡でペトルルカは、教皇侍医たちを批判しているが、かれらをアヴェロイスト呼ばわりしてはいない。ところが、教皇侍医のひとりからの反論にこたえた『論駁』第1巻（1352）においてはじめて、この医者がアヴェロイストとみなされている。ペトルルカの全著作をつうじて、<アヴェロイスト>が登場するのはこれが最初である。

ところで、教皇侍医をはじめてアヴェロイストと断ずるこの文章は、ペトルルカによる詩の擁護という文脈のなかで付随的に書かれている。すなわち、詩的「創作」(fictiones) をたんなる作り話として非難し（*Contra med.*, I, p. 36）、「詩人の仕事は嘘をつくことだ」とする（*ibid.*, p. 37）論敵にたいし、ペトルルカは詩を弁護しつつ反論している。

「それらの創作には……味わいぶかい有益な寓意的意味が宿っているのであり、聖書もまた、その文章のほとんど一つ一つにいたるまで、そのような意味にみちみちている。この聖書をきみは内心あざわらっているにちがいないが、しかし懲罰を恐れているのだ。……罰せられさえしなければ、きみはキリストに反対してはばからないであろう。じっさいきみは、無言の判断によって、キリストよりもアヴェロエスを選びとっているのだ。きみは、ことばでは別のことを叫んでいるが、ほくの言が凶星をさしていることを知っている」(*ibid.*, p. 36)。

ここでペトルルカは、聖書をひきあいだして詩を弁護し、詩的虚構にたいする非難は聖書非難にもなりうるのだという論の運びのなかで、論敵を反キリスト教的な



アヴェロイストと断定している。そして、本書第2巻においてこのテーマをさらに展開しようとするときにも、このような推測的断定の基調は一貫して変わらない。しかも第2巻では、＜アヴェロイズム＞攻撃は弁証学批判の一環としてなされている。すなわちペトラルカは、論理学（弁証学）に無知だという自分への批判に反撥して、相手の誇る弁証学的論究なるものが内容的にいかにも空虚でしかも＜異端的＞であるかを示そうとしているのである。いささか長くなるがその文章を引用してみる。

「しかし、愚か者よ、ほくは弁証学を欠いてはいない。むしろ、弁証学はどのように、ほかの自由学芸はどのように、それぞれ評価さるべきかを知っているのだ。……それらを学ぶのが誉めらるべきはもちろんだが、それらのうちに老いるのは子どももっかいのだ。それらは、いうまでもなく通路であって、いかなる人生の港をも知らない迷える放浪者にとってはいざ知らず、けっして目的ではないのだ。ところが、高貴な目的をもたぬきみにとっては、ゆきあたるものすべてが目的なのだ。きみが一晚中まんじりともせず、その軽率浮薄な頭で、おそらく何ひとつ結論らしい結論とてない脆弱な三段論法の一つも組みたてるたびに、きみは自分が幸福の絶頂にあると思ひこむのだ。そのとききみは愚かにも心中にこうつぶやく。『神は存在せず、それを高く求めるべきではない。けだしわれわれが何を知らう？ プラトンとアリストテレス、この偉大な二人は、世界について靈魂についてイデアについて論争している。デモクリトスは無数の世界を考えた。……さらに驚くべきことをあえて語る者もいた。まことにわれらの師アヴェロエスは知性の単一性 (unitas intellectus) を説いているのだ』。

こうしたことを、きみはつぶやく。ただし、こうしたことをきみ知っているとするばのことだ。それからきみは付けくわえる。『こうしたことについてだれが判断をくだしえよう。それにしても、おれの知りもしないキリストを、なんでおれが畏怖することがあろう。アヴェロエス自身、キリストにたいして、かつていかなる詩人もなしえなかったようなこと、いな、いかなる人間もなしえなかったようなことを、あれこれと中傷したが罰せられなかったではないか』。

……だが、かつてキリストについていささかでも語るなり書くなりしようとした者は、キリストご降誕後はむろんのこと、それ以前においても、だれしもみな最高の畏敬の念をもってしたのだ。……ところが、この一匹の犬だけは例外で、俗にい

うとおり月にむかって吠えるどころか、正義の太陽そのものにむかって、怒りに口を泡だてて吠えついている。……きみたちはこの犬をあがめ、この犬を愛し、この犬につきしたがっている。それもただ、きみたちが、生ける真理キリストに反対し、キリストを憎悪しているからにはかならないのだ。……

まことにそいつ〔きみの半獣神〕は、ぼくの神をこきおろしているのだ。……ぼくの神、そして彼岸の生にたいする希望と愛にみちびかれて安全な道をたどりつつ幸福な目的へとむかうすべての人びとの神を、こきおろしているのだ。ところがきみは、あわれにも、きみの偶像につきしたがいつつ好きこのんで、でこぼこだらけの横道にさまよいてこみ、きみのアヴェロエスがゆきついた、不信心にふさわしい結末にたどりつこうとしている。……おお、かわいそうに！ きみは弁証学を、つまりらぬ目的として定めたのだ。……ところで、いい年をした老人のくせに、くる日も、くる日も、子どもっぽいに没頭し、さて、夕方おそくわが家に帰っても、何ひとつ学びえていない。そして、いつまでもこうした馬鹿げた悪ふざけをやめようとせず、きみが屁理屈をこねているうちに、思いがけぬ死で、とつぜん幕がおりてしまう。——これほど愚かしいことがあろうか」(*ibid.*, II, pp. 51-53)。

これは基本的に修辞学的「創作」いかいの何ものでもあるまい。

ところで、この攻撃文の第一主題は時流の弁証学にたいする批判であり、<アヴェロイズム>攻撃はむしろ第二主題をなしている。すなわち、論敵の弁証学的論究なるものがいかに無内容であるかということ、しかも、それを目的化して空虚な論究のうちに真の「幸福な目的」を見うしなしたまま、なんのうるところもなくことばのうちに老いくちていくこと——このことを示そうとする文脈のなかで、論敵のアヴェロエス盲従や不信心が推測的に語られ、あるいは論敵の「偶像」アヴェロエスがキリストの敵として描きだされる。したがってここでは、<アヴェロイズム>攻撃は弁証学批判と切りはなしがたく一体をなしている。

さて、このような攻撃にたいし、医者の方は、ペトラルカの愛好する詩人たちこそ「真の信仰の敵であり、教会によって追放され信仰ある人びとによって忌避さるべき輩だ」と反論している (*Contra med.*, III, p. 58)。つまり、詩人ペトラルカを異端的人物として描きあげようとしている。要するに、双方とも論敵を、カトリック信仰の敵にしたあげようとしているのである。そしてこれは当時の一般の手法

だったといえよう。

してみると、あの教皇侍医が、ペトラルカの決めつけるように不信心で反キリスト教的だったと信じることは危険であろうし、かれがほんとうにアヴェロイストだったかどうかにもわかに断定しがたい。じっさい、論敵をアヴェロイストと決めつけての攻撃は、相互の論難が激化した段階ではじめてなされ、しかも修辞学的「創作」によってなされるのである。ただし確かに言えることは、この論敵やその仲間が広義のアリストテレス派に属していたということである（「きみたちはいつもアリストテレスの名を口にしておいでだ」(*ibid.*, III, p. 60)）。そしてまた確かなことは、ペトラルカがその論敵をアヴェロイストにしたてて攻撃するとき、この攻撃をつうじてペトラルカがめざしていた主要目的は、あるいは詩や修辞学の擁護であり、あるいは時流の弁証学にたいする攻撃だったということである。この文脈から切りはなして、かれの<アヴェロイスト>攻撃を論ずることは、一つの抽象にはかならない。要するに、ここでも、かれの<アヴェロイスト>攻撃は時流のスコラ学にたいする攻撃と切りはなしがたく一体をなしていたのである。

#### 4 「近代風哲学者たち」

『医学者論駁』における<アヴェロイスト>攻撃が基本的に修辞学的「創作」だとすれば、ペトラルカ晩年の一書簡 (*Sen.*, V, 2) は<アヴェロイスト>についての事実報告の観がある。そこでは、ペトラルカの面前であからさまにアヴェロエスをたたえる一人物が紹介されている。この人物のこぼを記してみると、

「あなたのつまらぬ教会博士たちは、そっくりあなたにくれてやりましょう。私は自分の従うべき人をもっており、だれを信ずべきかを知っています」。

「あなたのその使徒〔パウロ〕は、おしゃべり屋で、しかも気が狂っていたのですよ」。

「あなたは良いキリスト者であってください。私は、〔あなたのいう〕そんなことなど、いっこうに信じませんね。あなたのパウロやアウグスティヌス、それからあなたの誉めあげる他の人たちも、みんなひどいおしゃべり屋だったのですよ。あなたがアヴェロエスを読む辛抱さえできたなら、あなたのこんなほら吹きどもよりどんなにまさっているかがわかるでしょうに」(*Sen.*, V, 2, p. 880 [796])。

この人物も、これまで研究者たちによって、無条件にアヴェロイストとみなされ<sup>(18)</sup>てきた。

ところで、ペトラルカの説明によれば、この〈アヴェロイスト〉は聖職者である。「服装は宗教人でありながら、ふるまいも心も冒瀆的な……化け物じみた人間ども」のひとりなのである (*Sen.*, V, 2, p. 880 [796])。そして「この連中の口にかかると、アンブロシウスもアウグスティヌスもヒエロニムスも、知者というよりはむしろ饒舌の徒にほかならないのです。こんな新しい神学者たち (*novi theologi*) がどこから降って湧いたのかわかりません。かれらはすでに教会博士たちをも容赦しないのですが、もうすぐ使徒たちや福音書とて容赦しなくなるでしょうし、ついにはキリストご自身にたいしても不埒なことを吐きだしかねません。……連中のあいだでは、それら尊敬すべき聖者名のどれかが発せられるたびに、あるいは沈黙のうちに合図で、あるいは冒瀆的なことばで、それらを傷つけるということがしばしばで、これはいまや習慣にまでなっています。アウグスティヌスは見聞が広いが学識に乏しかった、と連中は言います。ほかの博士たちについても、これに劣らずぶしつけなことを言っています」(*ibid.*)。

そしてこの〈アヴェロイストたち〉は、ペトラルカによれば、「近代風に哲学する人たち」(*moderno more philosophantes*) であり、「キリストやその崇高な教えにたいしていくらかでも吠えたてないかぎり、ひとかどのことをした気になれない」のである (*ibid.*)。

それにしても、かれらはじっさいにアヴェロイストだったのだろうか。

ところで、かれらにかんするペトラルカの叙述そのものにも矛盾がみられる。たとえば、かれらは「キリストやその崇高な教えにたいしていくらかでも吠えたてないかぎり、ひとかどのことをした気になれない」のだと言われているが、しかし他方では、「もうすぐ使徒たちや福音書とて容赦しなくなるでしょうし、ついにはキリストご自身にたいしても不埒なことを吐きだしかねません」と言われている。この二つの言明は、あきらかに矛盾する。そして、あとの言明によって知るかぎり、かれらは使徒たちや福音書やキリストを現に批判してはいない。しかもかれらは僧服をまとった聖職者である。かれらがキリスト教そのものに批判的であるなどとは、とうてい考えられない。

ペトルカカの叙述にみられる矛盾は、おそらく、表現上の効果を意識した修辞学的動機に由来すると思われる。そこで、これらの矛盾点を括弧に入れたうえで、ペトルカカの証言を素直に受けとるとすれば、「新しい神学者たち」が現に批判しているのは、せいぜい教会博士たちである。より具体的にはラテン教父たちである。ところで、このラテン教父たち、なかんずくアウグスティヌスは、ペトルカカの最も傾倒するキリスト教哲学者であった。<sup>(19)</sup>ラテン教父たちにたいする批判や軽視は、ペトルカカの憤激をかうに充分だったのである。

以上の点を考慮しつつ、ペトルカカの証言をいまいちど検討してみるに、この「新しい神学者たち」は、おそらく新しいアリストテレス派の神学者たちで、プラトニズムの色彩のつよい教父哲学には批判的であった。そしてそのある者はアヴェロエスに高い評価を与えていた（その評価が、「注解者」アヴェロエスにたいしてのものか、知性単一説を含むいわゆるアヴェロエス説にたいしてのものかはともかくとして）。ところで、この「新しい神学者たち」について総じて言えることは、かれらがオッカム派の強い影響下にあったらしいということである。かれらは「近代風に哲学する人たち」とも呼ばれているが、これはまさに、当時「近代派」をもって任じていたオッカム派をさすものにほかならないであろう。

ここで思い合わされるのは、この同じ書簡のなかでペトルカカが、これら「近代風哲学者」を攻撃するにききだって、「弁証学者」(dialectici)を攻撃していることである。この人たちは明らかにオッカム派の論理学者である。

「友よ、口にするさえ激しい怒りがこみあげてきますが、こんにちでは弁証学者どもが群らがり出現しています。連中は、無知であるのみならず気違いじみでいて、腐った榎の木隠れ家からでも湧いてでた黒い蟻の一群さながらに、すぐれた教説のあらゆる沃野を片っぱしから荒廃させているのです」(Sen., V, 2, p. 880 [795])。かれらが身につけているのは、「すでに無数の天分を台なしにした、パリとオックスフォードのあのわずらわしい」論理である (Sen., XII, 2, p. 1008 [912])。

ここに指摘されているのは、14世紀中葉からオックスフォードとパリの大学を中心に全欧的波及をみせたオッカム派の論理学とその研究者たちにはほかならない。この新しい論理学者たちは、過去の作家にたいしては軽蔑の念をかくさない。かれらは「プラトンとアリストテレスを非難し、ソクラテスやピュタゴラスをあざわら

っている」(*Sen.*, V, 2, p. 880 [795])。さらに、キケロからセネカやリウィウスやウェルギリウスにいたるラテン古典作家を、うとんじたり、けなしたりする (*ibid.*, p. 880 [796])。

ここで興味をそそることの一つは、この「弁証学者たち」がアリストテレスをも非難していたという証言である。このことと関連して思いだされるのは、オッカミストたちが、アリストテレスを捨てようとはしないまでも、新しいしかたで批判的に解釈しなおそうとしていたことである。しかもかれらは、信仰と理性、神学と哲学との分離を強調し、哲学的・科学的分野における合理的・経験的探究に力をそそぐとともに、旧来の神学を批判した。こうして当時、オッカム派の人びとは「近代派」ないし「新学派」(*moderni*)とよばれ、これにたいしトマス派やスコトゥス派の人びとは「古代派」ないし「旧学派」(*antiqui*)とよばれた<sup>(20)</sup>。オッカミストたちはまさに「近代風に哲学する人たち」だったのである。

かれらの議論は、13世紀の旧神学の立場にたつ人びとにとっても、ペトラルカのように教父哲学の立場にたつ人びとにとっても、しばしば冒瀆的で異端的と思われえたであろう。ことに、信仰と哲学的探究とを切りはなす立場は、ペトラルカにとっては、「真理そのものを拒否しておいて、あれこれの真理をもとめること」にはほかならない (*De ign.*, p. 59)。けだし、アウグスティヌスの哲学観をいだくかれにとっては、真の哲学とは、真の知恵である神そのものを愛しあがめることにほかならないのである<sup>(22)</sup>。信仰なしに真の愛知はありえないのだ。

まず「真理そのものを拒否して」において、さて個別的真理を理性にもとづいて論理的に探究しようとする……そのような立場は、とうぜん、確固とした根底を欠くままに、あるいは断片的知識の寄せあつめに終わり、あるいは空虚なおしゃべりに墮する。——このことをペトラルカは、一貫して、その論敵たちのうちに指摘しようとする。そのときどきで論敵たちがどう呼ばれるにせよ、ペトラルカの批判は一貫している。かれらがアリストテリアンであれ〈アヴェロイスト〉であれ「近代風哲学者」であれ、あるいは弁証学者であれ哲学者であれ神学者であれ、ペトラルカの批判の基調は一貫して変わらない。そして、その論敵たちのうちにかれが共通に指摘する探究方法、それが弁証学的論究である。こうして、たとえば時流の神学者たちは、「神学者から弁証学者に、あるいはむしろ詭弁家になりさがる」(*Fam.*, XVI,

14)。そして、神についてあれこれと論じつつ、みずからは意識せずとも結局のところ、「神をもてあそび笑いものにして、自分たちのとんだ愚昧さの諸法則を神におしつける<sup>(23)</sup>」。かれらは、ペトラルカの目には、冒瀆的・異端のと映らざるをえない。ペトラルカのいわゆる「近代風に哲学する」「新しい神学者たち」、つまり従来アヴェロイストとみなされてきたこの「新しい神学者たち」は、じっさいにはむしろ、オッカム派の論理に身をよもらった神学者たちにほかならなかったのである。

このオッカム派にたいするペトラルカの攻撃は、すでに早くから見られる。『近親書簡集』第1巻においては (*Fam.*, I, 2; I, 7; I, 12), オッカム派の論理学者にたいする批判がくりかえされている。そこでは、探究の手段でしかない弁証学を目的化して、これを内容豊かな探究とすりかえていることが批判される。同様の批判は、『医学者論駁』においても、論敵<アヴェロイスト>にたいしてなされ(前節参照)、また当時の医学者たちにたいしてもなされる<sup>(24)</sup>。のみならず、ペトラルカの著作のいたるところで、時流の自然学者たちにたいしてなされる<sup>(25)</sup>し、すでに見たとおり神学者たちにたいしてもなされる。

してみると、その論敵たちをペトラルカがそのときどきでどう呼ぶにせよ、かれの攻撃の実質的目標は、おもにオッカム派、つまり「近代派」であったといえよう。そして、この「近代派」攻撃は、かれの直弟子サルターティをはじめとする次代のヒューマニストたちに受けつがれていくのである<sup>(26)</sup>。

## おわりに

以上の考察から明らかなように、ペトラルカの<アヴェロイスト>攻撃なるものは、その実体がいまいで、むしろ現実性に乏しいものだといえる。もしそれなりに現実性をもっていたとすれば、それは、ペトラルカが時流の新旧スコラ学派、なにかんづく新学派にたいして展開していた広範な戦いの、一局面としてであろう。つまり、従来アヴェロイスト攻撃とみなされてきたものは、その内実においては、むしろ「近代派」攻撃にほかならない。

ところで、ペトラルカあの広範な戦いは、それがアラビア文化との結びつきをもつ論敵、あるいはそう思われた論敵にむけられるとき、いっそう激越なものとならざるをえなかった。かれの<アヴェロイスト>攻撃がまさにそうであった。けだ

し、そのさいペトラルカの意識には、それまでの数世紀間にキリスト教世界がイスラム世界とのあいだに体験した苛酷な歴史が、おもたく影をおとしていたのである。すなわち、ペトラルカの〈アヴェロイスト〉攻撃にみられる護教的熱狂がそこから生まれでてくるいわば深層意識には、イスラム世界にたいする十字軍意識が根づよくひそんでいたのである。じっさい、それはときとして、かれの著作のそこそこに噴出する。しかも、このヒューマニストに独自のしかたで。

しかしこれは別に論ずべき問題である<sup>(27)</sup>。

### 註

- (1) *Sen.* は *Senilium rerum libri* の略。頁数は Francesco Petrarca: *Opera omnia*, Basileae 1554 のそれである。なお〔 〕内の数字は *Opera omnia*, Basileae 1581 の頁数を示す。
- (2) Cf. F. Gabrieli, *Il Petrarca e gli Arabi*, in *Rivista di cultura classica e medioevale*, Anno VII, nn. 1-3: *Studi in onore di A. Schiaffini*, vol. I, 1965, pp. 487-94.
- (3) すぐれたヒューマニズム文学研究家でありペトラルカについての文献学的研究の第一人者である Giuseppe Billanovich 教授は、かつて「アラビア詩人たち」について私が提出した疑問といくつかの仮説について、1964年10月4日づけの手紙でつぎのように書いている。——Finora non è stata data risposta per i “poeti arabi”. Certo il Petrarca non poteva intendere con questa definizione i poeti della scuola siciliana (「アラビア詩人たち」にたいする答えはまだ出ていません。もちろん、ペトラルカがこのことばによってシチリア派の詩人たちをさすことは、ありえなかったでしょう)。
- (4) *De vita solitaria*, in F. Petrarca: *Prose*, ed. Ricciardi, lib. II, ix, pp. 496-98.
- (5) Cf. E. Cerulli, *Petrarca e gli Arabi*, in *Studi in onore di A. Schiaffini*, vol. I cit., pp. 331-36.
- (6) *Africa*, ed. critica per cura di N. Festa, Firenze 1921, lib. VIII, v. 160 (p. 224).
- (7) これについては拙稿「ペトラルカの反自然科学論争」第3節（「哲学研究」第495号, 1965）参照。
- (8) *Rerum memorandarum libri*, per cura di Gius. Billanovich, Firenze 1943, lib. I, 26, p. 32 seq.
- (9) *De sui ipsius et multorum ignorantia*, Paris 1906, pp. 72, 73 (以下 *De ign.*



と略記)。

- (10) *Invective contra medicum*, a cura di P. G. Ricci, Roma 1950, lib. II, p. 52 (以下 *Contra med.* と略記)。なおこの箇所は本稿第3節に訳出引用されている。
- (11) ここでは、ペトルルカがアヴェロイストと規定する人びとを、さしあたり、かれの規定どおりに受けとっておく。しかし、アヴェロイストという概念そのものはかなりあいまいであって、アヴェロエス思想を完全に受け入れた者をそう呼ぶとすれば、おそらく西欧ラテン世界にはアヴェロイストはひとりもいなかったらうとも考えられうる。Cf. P. O. Kristeller, *Paduan Averroism and Alexandrism in the Light of Recent Studies*, in *Renaissance Thought II*, New York 1965, pp. 111-18.
- (12) Cf. P. O. Kristeller, *Petrarch's "Averroists"* (in 《Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance》, XIV, 1952, pp. 59-65), p. 59, n. 4. なお、クリステッラーがあげている研究者たちのほかにも、同じ見解をとる人が少なくない。たとえば、G. Saitta, *Il Pensiero italiano nell'Umanesimo e nel Rinascimento*, vol. I: *L'Umanesimo*, Bologna 1949, p. 75; G. Toffanin, *Storia dell'umanesimo*, vol. II, Bologna 1952, p. 124 seq.; P.P. Gerosa, *Umanesimo cristiano del Petrarca*, Torino 1966, p. 366 seq.
- (13) 前掲拙稿「ペトルルカの反自然科学論争」第4節「権威主義批判」(「哲学研究」第496号)参照。
- (14) Cf. P.O. Kristeller, *Petrarch's "Averroists"* cit.
- (15) かれらについては、つぎの諸論文を見ること。P.O. Kristeller, *op. cit.*; Idem, *Il Petrarca, l'Umanesimo e la Scolastica*, in *La civiltà veneziana del Trecento*, Firenze 1956, pp. 149-69; B. Nardi, *Letteratura e cultura veneziana del Quattrocento*, in *La civiltà veneziana del Quattrocento*, Firenze 1957, pp. 101-29.
- (16) たとえば G. Toffanin, *Per l'Averroismo padovano* (in *La religione degli umanisti*, Bologna 1950, pp. 143-60), p. 154.
- (17) *Fam.* は *Familiarium rerum libri* (per cura di V. Rossi, Firenze 1933-'42)の略。
- (18) たとえば Gius. Saitta, *L'Umanesimo* cit., p. 75 seq.; E. Cassirer-P.O. Kristeller-J.H. Randall, Jr., *The Renaissance Philosophy of Man*, Chicago 1956<sup>8</sup>, p. 140 seq.
- (19) 拙稿「ペトルルカのプラトニズム」(東京学芸大学紀要, 第2部門〔人文科学〕, 第26集, 1975)第4節参照。
- (20) オッカムおよびオッカム派については, cf. E. Gilson, *La philosophie au*

*moyen âge*, Paris 1962, pp. 638-87.

- (21) 前掲拙稿「ペトルルカのプラトニズム」第4節参照。
- (22) 同前第3節参照。
- (23) *De remediis utriusque fortunae*, in *Opera omnia*, Basileae 1554, p. 59 seq.
- (24) 前掲拙稿「ペトルルカの反自然科学論争」第3節参照。
- (25) 同前第2節参照。
- (26) Cf. E. Garin, *La cultura fiorentina della seconda metà del 300 e i «barbari britanni»*, in *L'età nuova. Ricerche di storia della cultura dal XII al XVI secolo*, Napoli 1969, pp. 139-66. なおガレンによれば、反アヴェロイズムの立場をとることは、14世紀後半ともなれば、少なくとも哲学的領域においては、もはや「今日的」意義をもちえなかった (*ibid.*, p. 149)。
- (27) この問題についての考察は、拙稿「ペトルルカとアラビア文化」(東京学芸大学紀要, 第2部門, 第28集, 1976)にゆずる。

#### 補 註

- (10a) これより数年前の作品 *De otio religioso* にもすでに「不敵なアヴェロエスの病毒」(*temerarii virus Averrois*)ということばが見られる(ed. Gius. Rotondi, Città del Vaticano 1958, p. 24)。このことばをペトルルカのアヴェロエス攻撃史においてどう位置づけるかについては、ここでは論じないことにする。ちなみに、この作品は1347年に書かれ、のちに訂正や補筆がなされた。補筆は1357年以後にまで及ぶ (Cf. ed. cit., Introduzione)。